『八重山鳩間島民俗誌』

大城　公男

はじめに

鳩間島は八重山諸島の中の小さな島である。円い形をしたこの島は周囲わずか3.8キロメートル、いちばん高い所で海抜34メートルしかない。この島は、近年マスコミによく取り上げられる。八重山諸島の中では人の住んでいるいちばん小さな島で、過疎のいちばん進んだ島だからである。そこから、さまざまな社会的ひずみが現れる。それらがマスコミの格好の的となる。

学校はあるが、この島で生まれた児童・生徒は一人もいない。沖縄本島や遠く本土の各地から受け入れた里子である。学校を存続させるため、村の幹部たちが施設を回って「子乞い」をした。それがテレビドラマになった(「瑠璃の島」)。現在の島の人口は64人、児童・生徒は９人（小５、中４）である（2012年８月)。共同体としての村の機能を維持することもぎりぎりで、伝統行事や祭祀も大きく変容した。それがドキュメンタリーとして放映された。

しかし、1960年代の初頭、この島には700人余の人が住み、学校の児童・生徒は160人を超えていた。過疎化現象が全国的にすすむ前である。飲料水にも不自由するこの島ではイネは作れない。イネは６キロメートルほど離れた向かいの西表島に通ってつくる。そのため、どの家でもサバニと称する小舟を持っていた。農業には条件の悪い島であったが、周囲を海に囲まれたこの島は豊かな漁場に恵まれていた。春と夏のカツオ漁、秋のトビイカ漁、角又（ネコノミミ）の養殖と採取で、島は一年中賑わった。夏はカツオ漁の最盛期と稲刈りが重なる。その時期になると人手が足りず、宮古島や沖縄本島の糸満地方からたくさんの出稼ぎの人たちがやってくる。そのころ人口は1000人を超え、この島

は八重山地方で最も人口密度の高い島となった。

本書は、島がいちばん活気にあふれ、賑わっていた1960年代初頭を現在として述べている。そのころまでは、年中行事も祭祀も伝統的に行われていた。また村の自治組織も整備され、共同体としての機能を十分に発揮していた。

本書には付章として「鳩間島研究略史」を載せた。調べてみると戦前から今日に至るまで、相当数の研究者がこの小さな島に調査・研究のために入っている。自然科学系の研究者もいるが、宗教・民族・文化人類学系の研究者が多いこれらの人たちの報告書には示唆に富むものがあり、私が参考にしたものも多い。

しかし以下に述べることは、これまでどの研究者も取り上げることはなかった。本書をまとめるに際し、私は歴史的に見ることを重要視した。現在の民俗が歴史的な過程で積み上げられてきたと実感するからである。特に現在の年中行事や祭祀の中心となっている神は村の発生と深く関わって現れ、絶えることなく敬虔に祀られてきた。初期の村と村を守る神は如何にして出現したかについて略述する。

御嶽と村

島の中央よりやや南寄りに小さな山がある。山裾の底辺部で東西約400メートル、南北約150メートルのこの山は、高さわずか海抜34メートルの低い山である。しかしこの山は、この島の人々の信仰生活と深く結びついている。頂上一帯には広く石垣（グスクという）の積まれた跡があり、かつてそこに村があったことを示している。そこからは、今でも土器や陶磁器片、貝殻などを容易に拾うことができる。この山を中森とよぶ。

考古学の研究から、一五世紀の後半には山の上に村があったことが分かっている（発生についてはよくわからない）。　そのころ八重山地方は群雄割拠の時代で、各地で豪族が台頭し覇を競っていた。さらに、琉球王国の統治の手がこの地方に伸び始めていた時代でもあった。このような歴史的背景から、一五世紀後半、八重山地方においては海岸の崖上や丘陵地にいっせいに村がつくら

れるという現象が現れた。正確には低地から村が移動した。それらの村は石垣で囲われていた。

沖縄地方の古い（近世・古琉球）村には、一般に御嶽と呼ばれる拝所がたいてい二つ以上ある。御嶽は「ウタキ」と読む。しかしこれは首里王府の政策的な統一名称で、学術用語にもなっているが、人々の日常生活においては地方特有の呼び方がある。八重山地方ではウガン・ヤマ・オン・ワーなどと呼ばれ、御嶽と呼ばれることはほとんどない。鳩間島ではウガンまたはヤマと呼ぶ。

複数ある御嶽（ここから一般的用語を使う）の中で、村の祭祀や年中行事の中心となっている御嶽がかならず一つある。その御嶽は村の草分けの家の先祖が建てたといわれ、神を祀る人（女性）はその家の血筋から出ることになっている。中森の東側三分の一の山の頂に、鳩間島の守護神を祀る拝所がある。その拝所を友利御嶽（ともりうたき）と呼ぶ。しかし、島の人々は友利御嶽と呼ぶことはほとんどなく、トゥムリウガン、あるいは単にヤマとよぶ。この友利御嶽こそ、鳩間島の村建てと深く関わって現れた。

御嶽のなかで、神のおられるとされる最も聖なる空間をウボと呼ぶ。ウボに入ることのできるのは神を祀る女性だけである。沖縄本島やその周辺の島々ではヌルあるいはノロ、八重山地方では石垣島でツカサ（司）、鳩間島ではサカサと呼ばれる。一般の参拝者はウボに通じる入り口で拝む。そこには門が設えられており、香炉がおかれている。そこをパイデン（拝殿）と呼ぶ。

友利御嶽のウボは大きな岩の上にある。岩は北側で土に埋もれ、南側で空に向かってせり出すように露出している。岩の北側で、ウボに通じる小さな門がある。両側で３本ずつ、６本の柱に瓦の屋根が載せてある。門からウボへ通じる細い道はＳ字型に石垣が積まれている。直接ウボが外から見えないようにした工夫である。これで察せられるように、御嶽は北に向いている。このことは、後にのべるように御嶽と村の必然的な関係を示している。

門から岩を取り巻くようにして、大小・形の異なる小部屋に区画された石垣が積まれている。御嶽の発生に関する先学の研究から、そこは葬所であった。山の上に村があったころ、死人が出ると人々は遺体をそこへ運んで放置した。

そして遺体が白骨化すると骨を拾い、彼らなりの基準で区画された部屋に収めていたと思われる。

そして、これも先学の研究から、葬所のどこかでは死者を弔うなんらかの祭祀が行われていたにちがいない。実際そのあたりからは、祭祀に使われたと思われる土器もいくつか出土している。それが御嶽の原型となった。後に人々が山から下りて低地に村をつくると、そこは祖神を祀る拝所、御嶽として整備された。

西暦1500年、オヤケアカハチの事件が起こった。大浜村（石垣島）のオヤケアカハチなる豪族が、先島地方に領域を拡大しようと画策する首里王府に抵抗して旗を揚げた。やがて八重山地方の豪族たちはアカハチに与する者と王府方に付く者とに分かれて争い、八重山全体が騒然とした雰囲気に包まれた。しかし、圧倒的な勢力の王府軍によってアカハチの乱は鎮圧された。それを契機として、一六世紀の初めごろ、八重山地方では高地から低地に村を移すようになった。

それでは、鳩間島の場合、山から下りた人々はどこで村をつくったか。現在の村は御嶽の建つ山の南側で、海に面して南向きにつくられている。しかし、御嶽と村の関係でみると、これは奇妙な構図である。というのは、神が村と村人に背を向けて北を向いているからである。御嶽は村に向かって建てられる。これが沖縄の古くからの宗教観であった。村は、中森の北にあったと考えるべきである。（他にも根拠はあるが、ここでは省く）

御嶽は村の背後の丘陵地や山の斜面、あるいは頂上で村に向けてつくられる。これをクサティムイ（の「思想」）という。クサティムイは「腰当森」の字をあてる。あたかも子供が母親の膝の上で安心して休んでいるように、村人が神の膝に抱かれているような構図である。神が背後から日夜村を見守っておられるお蔭で、村人は安心して生業に励むことができる。友利御嶽と中森の北にあった村は、まさにクサティムイの構図であった。

神の素性と性格

岡本太郎は沖縄の御嶽について、「まったく何の実体も持っていない」と述べ、こう続ける。「この神聖な地域は、礼拝所も建っていなければ、神体も偶像も何もない。森の中のちょっとした、何でもない空地」(『沖縄文化論』 中公叢書)。それでもこの偉大な芸術家は、それについて「何もないこと」の眩暈として感動するのだが、たしかに御嶽を初めて見る人は「何もない」という印象を受けるであろう。

しかし、沖縄の人々は何にもない所に神の存在を実感し、何百年も前から敬虔な祈りをささげてきた。もちろん人々は、自分たちが頼りとする神はどのような神なのか、まったく知らない。また、知ろうともしない。知らなくても祭祀にはいっこう差支えない。ただ、そこに神がおられると信じるだけでいいのである。

ところが、村人の意識とは別に、そこで行われる祭祀の儀礼を注意深く観察すると、神の輪郭が実感を伴って浮かんでくるのである。神にも個性がある。友利御嶽は、元葬所で行われていた祭祀が原型であったことを述べた。しかし、ここでの祭祀を観察すると神は先祖一般（複数）ではないようである。一人の人物が神として祀られた。その経緯である。

農業技術の未熟な時代の農民にとって、農作物の管理は神頼みであった。農作物の被害は風・虫などの自然災害であったが、そのなかで農民が最も恐れたのは旱魃であった。苛酷な納税を強いられていた農民にとっては、旱魃による農作物の被害は彼らの生存をも脅かした。日照りが長く続くと、村役人が下知し、村を挙げての大がかりの雨乞いの祭事がおこなわれた。八重山地方の村々には、数多くの雨乞いの（儀礼）歌が残されている。

鳩間島においては、雨乞いは友利御嶽で大々的な祭事が行われた後、村に下りて数か所の要所でもおこなわれた。友利御嶽の祭事は三つの段階を踏んでおこなわれた。そのいずれにも歌が伴う。ここでは他を省略して二回目の祈りの際に歌われる雨乞い歌に注目する。

三十四節からなるこの長い歌は、雨が降らなくて飲み水もなく、イモ蔓も萎え、村人はたいへん難儀をしております、どうか雨を給われ、で始まる。以下

人々の苦労が具体的に述べられ、「雨給われ」が最後まで続くのであるが、途中から一人の人物が登場する。ヤマトを出発したその人物は、船を操りながら沖縄本島・宮古諸島・石垣島・竹富島・黒島と南下し、ついに鳩間島にたどり着く。そして、そこを安住の地として上陸する。

ここで初めて、その人物がフナヤギサ（「船屋儀佐」と表記）なる名前であることが明かされる。この長い歌は、この人物と鳩間島との関係を叙事詩風に綴っているが、最後の数節ではこの人物が井戸を掘ったことが述べられる。そのお蔭で村人は柄杓で水をすくい、つるべで水を汲む恵みを与えられた。そして、それが呼び水となったのか、降雨にも恵まれるようになった。

この雨乞いの儀礼から二つのことが読み取れる。一つは神の素性についてである。友利御嶽の神前でこの歌が歌われているということは、彼らが必死になって祈っている対象の神がこの歌の主人公であることがわかる。つまり、この御嶽の神は先祖一般ではなく、一人の人物が神として祀られているのである。そして、儀礼から読み取れるもう一つは、この神の性格、鉄との関係である。井戸を掘ったということは鉄の道具なくしては成しえない。つまり、その神は鉄の道具を駆使する鍛冶の神であった。

この神の成立は鉄の伝播という歴史的・社会的現象と深く関わっている。鉄が八重山地方にいつごろ、どのようにして伝えられたかはよく分かっていない。これまでの研究によると一三世紀から一四世紀ごろ、この地方の海域には大陸や大和の商船・倭寇が活発に活動していたといわれる。それらの船は島々に立ち寄り、飲料水や食物を補充したり、物々交換で島の特産物を買い求めたりした。その中には、当然鉄も含まれていたと考えられるのである。雨乞いの歌の主人公は船乗りで、ヤマトから船を操り、島々を伝ってやってきたというのはこれら商船・倭寇の活動の反映であろう。

友利御嶽で祀られる神が鍛冶の神であることは祭祀の儀礼からも検証できる。鳩間島の年中行事・祭祀はほとんどこの御嶽で行われる。祭祀には決まった型がある。初めに香を立て、神に近づく唱え言（カンフチー神口）が述べられる。その次に新たに香を立て、神の名を呼び上げる。そして最後にまた香を立て、

その日の祭祀の目的である祈り、願い事が長々と続けられていく。

ここで唱えられる神の名は長い修飾語を伴うのであるが、実質的な神の名は「ナルザナルンガニ・ザルザナルンガニ」という呪文のような二語で示される。この二語は沖縄の古謡によく見られる対句仕立てになっているが、さらに神の名は二語が共通に持つ「ナルンガニ」に絞られる。ナルンガニは「鳴る（ん）金」で、いうまでもなく「金」は鉄を表す。そして、「ナルザ」・「ザルザ」は擬音語で、鉄の道具から発せられる金属音を表現した。鉄の道具に初めて接した人々の驚嘆と印象が、それを操る人物が死後神として祀られるとこのような神の名になったのであろうと推測する。

サカサ（女性神役）の唱えるカンフチは代々口移しで伝えられてきたものであるが、唯一この御嶽の神の名を留めた史料がある。『琉球国由来記』（1713年編纂）の巻二十一は「八重山編」となっているが、その中に村々（与那国島を除く）の御嶽の由来と神の名を記した項がある。鳩間島の友利御嶽については由来はないが、神の名については「大サナルカネ」と記す。このナルカネは言うまでもなく先に述べた「鳴る金」である。

「大サ」は「ウフサ」と読み、「たいそう、非常に」の意で「鳴る」を修飾する。『琉球国由来記』に載る「大サナルカネ」とサカサの唱える「ナルザナルンガニ・ザルザナルンガニ」は、構造的にはまったくおなじである。『琉球国由来記』の八重山編は1701年から1703年にかけて調査が行われたといわれるが、この神の名はそれ以前に成立していたというのは驚きである。

葬制と墓制

葬制・墓制の歴史も御嶽の出現と密接に関わっている。中森の北西から南西にかけ、野の中に主のわからない墓が点在している。石を方形に積み上げ、厚さ10センチから15センチほどの平たい石で覆っている。広さは、内部で縦150センチ、横100センチ、高さ80センチほどである。隙間から覗くと、骨甕が三つから四つ、多いものでは五つから六つほど納められている。割れて骨が散乱しているものもある。墓の一つを開けて調べてみたが、銘はなかった。

この古墓はフジマレと呼ばれる。島の人たちにはその存在は周知のことであったが、それ以上のことは分からず、また関心もなかった。その形態は別にして、この墓の最も大きな特徴は二次葬が行われていたということである。それでは一時葬はどこで行われていたか、当然この疑問が起こる。この疑問に対して、私はブシヌヤに着目した。

島の北は強い北風と波に浸食されてU字型、あるいはV字型の海岸線が続いている。そのいくつには小さな砂浜もできている。島の北西部で、海に突き出た崖の上にブシヌヤはあった。崖の縁を回るように大きく石垣が積まれ、陸地側でいくつかの区画に分けられていた。この形は、先に述べた友利御嶽の石積みを彷彿とさせるもおのであった。実際島の古老たちは、「ブシヌヤはウイヌウガン（友利御嶽）と同じだ」とよく話していた。

その形から城塞を連想し、ブシヌヤ（武士の家）と呼び習わしてきた。この石積みを利用してきた人たちが世を去り、どのように使われていたかについても人々の記憶が薄れてきたころからこのような呼び方が現れた。それでも明治生まれの古老たちのなかには、ブシヌヤのそばを通るときは手を合わせたり、子供たちにブシヌヤに近寄ってはいけない、マジムン（亡霊）に連れ込まれたら戻れなくなる、などと語っていた。

ブシヌヤは墓であった。実際好奇心の盛んな若者たちが中を探索し、骨があったと証言している。古老たちの態度や話も、そこが墓であったことを暗示している。ブシヌヤは、最初から村の共同葬所として作られた。その起源は友利御嶽の創建と前後する。中森に村があったころ、友利御嶽の建つところは葬所であった。それが、後に御嶽に変わった。仲松弥秀は、葬所が御嶽に変わると改めて別に葬所を設ける必要があったと述べる。

このような経緯で作られたのがブシヌヤであった。死人が出ると人々は遺体をブシヌヤに運び、放置した。後遺体が白骨化すると収骨し、区分けされた部屋に何らかの基準によって納めていたと思われる。この葬法が長い間続いた。その後骨を風雨にさらし続けることを厭い、甕に入れて別に納めるという葬法が伝えられた。フジマレの出現である。その後一次葬はブシヌヤで行い、二次

葬はフジマレで行うという併用の期間が続いた。

そして、明治以降は現在の掘り抜き墓へと移る。中森は砂岩が基盤となっている。長い年月の間に風化して上層部は厚い砂地となり、そこに大木が茂って森になった。中森は、西三分の一ほど側面の岩が露出している。砂岩は加工がしやすい。その側面をくり抜いて墓として利用している。岩の側面から棺を入れられるほどの方形の穴（70センチから80センチ）を開けて掘り進め、内部は前方に棺を置き、後方に骨甕が並べられるほどの広さを確保する。入り口は厚さ10センチほどの平たい石で蓋をする。

骨は5年か7年目に墓から出して洗い（アライクサという）、甕に入れて墓の中に納める。この形式の墓は、明治以降に作られるようになった。明治に入ると、糸満地方（沖縄本島南部）から多くの漁師がやってきてトビイカ漁を始めた。その漁師たちに教えられたという。作るのに特別の用具は要らない。鑿とハンマーがあればよい。時間をかければ男一人で作り上げることができる。墓は戦後も作られていた。

おわりに

民俗誌は一般に村の概況・歴史・生業・人の一生・葬制・墓制・祭祀・年中行事等について語られる。本書も例外ではない。しかし本書においては、これらの領域においてもこれまで触れられなかったこと、見過ごされてきたことを多く取り上げている。それだけではない。それぞれに従来取られていた意味や解釈と異なった新しい見解を出しとものも多い。

現在の行事や祭祀についても、本書においては従来の常識とは全く違う視点からアプローチしている。たとえば、パーレ（船漕競争）が雨乞いの祭事であることや、結願祭が比較的新しく導入された祭りであることとその性格、ユーニガイが王朝時代の役人が深く関わった祭事であったことなどである。祭事の儀礼をていねいに見ていくと全く新しいことが見えてくる。

もう一つ挙げよう。祭事のカンフチ（唱えごと）は代々口移しで伝えられてきた。そしてそれは、他人に聞かせたり教えたりすることは絶対にタブーで

あった。祭りが近づくとサカサたちは特定の家に揃い、ひと月前から来る祭事のカンフチを何度も唱え、確認し合った。その間、家の四つ角には村の役員たちが立ち、村人が近づかないように気を配った。

本書には、鳩間島のほとんどの祭事のカンフチを収録してある。なぜそれが可能であったかについてはここでは省略するが、ほとんどの祭事のカンフチを収録できたことは今回の調査・研究の大きな成果であったと考えている。

今後の課題はそれらを検証することであるが、それがきわめて困難な状況にある。鳩間島は八重山諸島の中で最も過疎の進んだ島である。伝統の祭祀や行事は多くが省かれ、残されたものも簡略化されて行われている。実際に島の生活を知る人たちも多くがこの世を去っている。検証するための根拠となる資料が得難くなっているのである。著者としては資料や儀礼を注意深く、慎重に考察して結論を出したつもりであるが、本書が鳩間島の歴史と文化の定説とされ、固定化しないか恐れる。

最後に、私が『東北宗教学』に寄稿することになった縁について簡単に述べたい。平成13年の4月から平成15年の3月まで、私は東北大学宗教学研究室で学んだ。公職を定年退職して2年後、社会人枠で入れてもらった。そこで私は、鈴木岩弓教授から宗教学の基礎を学んだ。もしそこで学ぶ機会がなかったら、本書はこのような内容と体裁を持たなかったことは明らかである。その意味で、東北大学宗教学研究室で学ぶ機会を与えられたこと幸いに思うとともに、鈴木岩弓教授には改めてお礼申し上げる。

主な参考文献

喜舎場永珣　『八重山歴史』(1954)　『八重山民俗誌　上巻』(1977)
仲松弥秀　『神と村』(1975)『古層の村』(1977)
石垣市総務部市史編集室　『石垣市史叢書　8』(1998)
安里進　『グスク・共同体・村』(1998)
牧野清　『新八重山歴史』(1972)　『八重山のお嶽』(1990)

（本書は2012年6月、第31回風土研究賞を受賞されました。）